慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『大地に立つ』と加藤一夫：『大地に立つ』の位置と総目次
Sub Title	Daichi ni tatsu (Standing on the earth) and Kazuo Katoh
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1986
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.79, No.5 (1986. 12) ,p.531(81)- 540(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19861201-0081
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19861201-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

『大地に立つ』と加藤一夫

——『大地に立つ』の位置と総目次——

小松隆二

はじめに

先に，私は，長い間忘れられかけていた加藤一夫について，本誌に2回にわたって紹介を試みた。それらは，時代とともに民衆芸術，アナキズム運動，さらには農本主義の指導的地位にあった加藤の生涯（「土の叫び地の囁き」78巻4号，1985年10月号），そして彼の活動では一つのピークをなす『原始』の総目次の紹介や位置づけ（「『原始』と加藤一夫」78巻5号，1985年12月）を行うものであった。

その後，加藤に対する関心は少しずつ高まりを見せている。たとえば加藤一夫研究会により機関誌『加藤一夫研究』の刊行，あるいは加藤の個人誌『科学と文芸』『原始』などの復刻の企画も耳にする。

しかしながら，その関心の高まりはまだ限られた範囲においてであり，加藤研究の裾野はけっして広いとはいえない。現に加藤理解に欠かせない基礎資料の整備・蓄積さえ十分には行われていない。加藤自身の著作の全体像はもちろん，彼の主宰ないしは関係した主要な新聞・雑誌類さえ，未発掘の面を多く残している。その点では，加藤に関する本格的研究は，なお今後にまたなくてはならない段階である。

その未発掘の雑誌の一つである『大地に立つ』については，先に，私が『原始』を紹介した段階で，すでに紹介を予定していたものであった。『原始』は28冊で終刊を迎えるものの，しばらくの中断の後，『大地に立つ』に引き継がれる。そのため『原始』と『大地に立つ』は一連のものとして理解する必要があり，加藤を総合的に理解するためには，『原始』のみの紹介では片手落ちといえるわけである。それに，両誌が継続する流れの中で刊行されているという形式上の理由だけでなく，加藤の内面においても，両誌は切り離しがたく結びついていたことにも，注意を向ける必要がある。それは，『大地に立つ』を刊行し，土地や人間社会のことを真剣に考えるうちに，結局，かつて追求した＜原始＞の精神に還る必要を，加藤自身が改めて確認するにいたるという内的陶冶・到達からもいえることである（「原始を回復せよ」『大地に立つ』第3巻第1号，1931年1月）。

このようなことから，そう間をおかないで，『大地に立つ』の紹介を行う責任を感じていたが，容易に機会をつかめず，今日まで延ばさざるをえなかった。このたびようやく時間をさくことができたので，本稿でその責を果たすことにした。

その『大地に立つ』は，これまで1，2次を通じての全揃いは発見されていない。本稿の段階でも，全揃いを所蔵している図書館等は発見できなかった。その点からも，同誌も超稀覯本の1つといってさしつかえない。そこで『原始』に関する先の拙稿にならって，総目次の紹介と位置づけを中心に筆をすすめることにする。ただし誌面の都合，そして性格の相違を考慮し，今回は雑誌型の第1次『大地に立つ』のみの紹介にとどめることにする。リーフレット型の第2次については，稿を改めて取り上げることにしたい。

1　『大地に立つ』の創刊とその前後

前掲の『土の叫び地の囁き』でみたように，加藤一夫が『原始』を刊行したのは，彼の38歳から40歳にあたる1925年1月から1927年4月の間である。2年をわずかに超える，その間に，彼は28冊の『原始』を世に送りだす。

関東大地震の災難で，加藤は，多くの社会主義者・

アナキストとともにいったん巣鴨署に留置される。しかし，東京を離れることを条件にすぐに釈放される。そのため，荒廃の中，娑婆には出たものの，釈放条件を満たすために，直ちに家族を連れて東京を離れざるをえなかった。あてがあって東京を離れることにしたわけではないので，困ったが，そうもいっておれない。ともかく関西在住の民衆詩派の富田砕花を頼って西下する。

かくして芦屋に到着。以後およそ2年間，そこに滞在することになる。その間に，個人誌として刊行するのが『原始』であった。いわば東京追放中に文芸や思想に関して，湧きいづる創作や考察への意欲や成果を表白する場としたものである。

もっとも，加藤はそのまま関西に住みつくことをせず，1925年8月，家族とともに芦屋をあとにして再上京する。そのため，地方の視点をもって出発した『原始』も9号からは中央の東京での刊行に変わる。そのまま終刊号の28号まで[(1)]，東京府下武蔵野村吉祥寺での刊行となるので，『原始』は芦屋で始まり，東京で終わることになる。

それからしばらくの沈黙ののち，2年半経過した1929年，加藤はまたも個人誌ないしは自らが中心となる雑誌の刊行に意欲を燃やす。その結果送り出されるのが『大地に立つ』であった。

『大地に立つ』の創刊は1929（昭和4年）年10月。菊判41頁で出発する。「加藤一夫編集」を表紙にも大きくうたっているように，編集人は加藤。ただ刊行にあたって春秋社に援助を仰いでいるので，発行所は春秋社，発行人は神田豊穂があたる。この点について，加藤は，創刊号「編集の後に」で「本誌の発行所は『春秋社』であるが，編集は僕自身の家でやる。仮りにその編集所を『大地に立つ社』と名づけておく。原稿や寄贈雑誌等は編集所宛に願ひ度い」といい，春秋社はあくまでも事務的な協力をするにすぎないことを説明している。

『大地に立つ』の刊行にあたって，加藤は『原始』の主な読者たちに刊行の挨拶を書簡で送っている。春秋社が『大地に立つ』刊行会の名で刊行の挨拶を送るときに，そのB4の用紙の後半分を使い，一緒に書き送ったもので，謄写刷りである。やや長くなるが，資料的にも貴重なものなので，全文紹介してみよう。

「今回『大地に立つ』を刊行しました。小さな貧弱な雑誌ですが，小生の新らしい考へを土台として，新らしい感想や研究や創作をのせて行きたいと思って居ります。即ち，人類の生活を『大地に立つ』ることをもって第一の主眼とし，その立脚点から現代文明を批評し，新らしき進路を求むると共に，特に，東洋思想及び農村問題，農民文学に力を注ぎたいと思って居るのです。

従年の我が友とは相容れないものもあるでせうが，却って喜んで下さる方も多いと思って居ます。何うか御一読の上，単に一購読者たるのみならず，進んでこの運動に御助力を与えて下さることを，衷心から希願する次第であります。」

『大地に立つ』創刊前後は，農に関心が移っていく点で，加藤にとっては一つの転機の時期にあたる。かつての『原始』刊行時は，大震災後のアナキズム運動の後退期にあたっていた。労働組合レベルでは，アナキズム系に代わって，総同盟が圧倒的な力を持ち出し，アナキズム系を少数派に追いやりつつ，同時に巨大化した自らの内部でも左右の対立，そして分裂に直面するといった状況を迎えていた。思想運動レベルでも，社会主義陣営の場合，アナキズムを凌駕して，社会民主主義とマルクス主義が躍進し普通選挙の時代にそなえていた。アナキズム系は軍部による大杉栄たちの虐殺に対する和田久太郎らの復讐活動の余波で，厳しい弾圧にさらされていた。そのため，他派に比し，後退の流れも急であった。それでも小集団グループ中心に，多様な団体や機関紙誌の存在・活動は続いていた。その多様な機関紙誌の代表的なものの一つが『原始』であった。

『原始』が終刊を迎える頃も，アナキズム系をめぐる状況は，創刊時の後退の趨勢とそれほど変わってはいなかった。その間，アナキズム系も手をこまねいていたわけではなく，思想運動レベルでは黒色青年連盟（1926年1月），労働組合レベルでは全国労働組合自由連合会（1926年5月）の結成をすすめるなど，初めての全国組織を旗上げしたり，後退に歯止めをかけようと努めてはいた。ところが，その努力にもかかわらず，その後もアナキズム系は後退の趨勢を阻止し，前進・

注（1） 前掲拙稿「『原始』と加藤一夫」において，『原始』の終刊号は28号と思われるが，若干の留保が必要である旨記した。何の予告も，断わりもない，全く突然の終刊であったからである。その後の調査で，従来の推察通り，『原始』の終刊は第28号であることが確認された。たとえば畠山清身「加藤一夫に喧嘩を売る」（『悪い仲間』1928年2月）でも，そのことが確認できる。

発展に向かうことはできなかった。そんな時の『原始』の終刊であった。

それからおよそ2年半の経過。その間，全国自連の分裂，黒色青年連盟による純正アナキズムの受容とセクト化，かつては多数のアナキズム系機関紙誌の中では，つねに中心的位置にあった『労働運動』の消滅と，劣勢に拍車をかける動きが続き，厳しい恐慌と弾圧の下で，アナキズム系はますます後退の様相を深めていた。

このような状況下に，アナキズム系ないしはそれに近接するグループの間では，農民・農村運動に新しい動きが目立っていた。日本農民組合などの合同の動きを背景に，既存の『小作人』グループのほか，『農民』『農民自治』『農村青年』グループの動き，また加藤も部分的に関わる岡本利吉らの農村青年共働学校の動きなども活発化していた。そんな中で，加藤も都市・工業への批判，搾取なき農本社会への期待を強くもつようになっていた。『原始』を支えていた時代の意識や理想とは明らかにちがうものを抱くようになっていたのである。

このような状況下に生み出されるのが，『大地に立つ』であった。もちろん，『原始』の時代にも，同誌で「農民問題」の特集を組むなど，農民・農村問題やその運動にも関心は示していた。しかし，なお農民や農村よりも，文学や芸術にはるかに比重がかかっていた。それに対し，『大地に立つ』の時代になると，なお文学や芸術にも興味を示しつづけはするが，それ以上に農民・農村そのものが主たる関心事になっていく。『原始』から『大地』に変わる表題がその相違をもっともよく示しているといってよいだろう。(2)

2　『大地に立つ』の協力者たち

編集人加藤，発行人神田豊穂の陣容で出発した第1次『大地に立つ』は，3巻1号（1931年1月）の終刊まで編集，発行人，そして発行所（春秋社）とも変わらない。

創刊号から表紙に掲げられた「加藤一夫編集」の看板も最後まではずされない。それだけ加藤による編集人の仕事は，名目だけではなく，実際にもその業務に責任をもつものであった。個人誌で始まって，やがて加藤以外のものにも広げる半個人誌になった『原始』を継ぐかたちなので『大地に立つ』でも，加藤の役割は通常の編集人のそれを超えるものであった。たしかに『原始』とちがって，最初から加藤以外のものも執筆はしているが，加藤なしには存在しえず，明らかに加藤の半個人誌といってよいものであった。実際に，春秋社も，刊行にあたって配った挨拶状にはっきりと「久しく沈黙を守り，瞑想に耽って居ました，加藤一夫が今回，思想上の新しい転回を機として，半個人雑誌『大地に立つ』を本社から刊行することになりました……」という風に，加藤の「半個人誌」として宣伝している。

執筆者には，信仰上あるいは思想上加藤とつき合いの深かったもの，たとえば前者では栗原荒野や鑓田研一，後者では麻生義，犬田卯，高群逸枝，松原一夫，安岡黒村ら，ほかに山川時郎，土屋公平らのように，この雑誌を通して知り合うものなどもいた。思想関係者の場合，依然としてアナキズム系ないしはそれに近いものが多い。ただ第1次『大地に立つ』にしろ『原始』ほどアナキズム色は濃くないし，第2次にいたると，さらにアナキズム色は薄くなる。もっとも第1次でも，大地に立つコミューンの訴えをなすときの用語や視点は（第2巻5，6号など），明らかにアナキズムのそれであり，加藤自身の農本社会論にはアナキズムの理論が強く働いていることはいうまでもない。

内容的には，たまたま『大地に立つ』の創刊と重なったトルストイの娘トルスタヤの来日は，加藤にとっては大きな事件であったので，しばらくはトルストイ関係の記事が目立つ。それに象徴されるように，当初は文化，芸術，文学的性格の論稿が多い。中には，注目に値する農民文学・芸術論もみられる。その後，次第に農本社会論など農業とそれを基礎にした農村社会に関わるものが目立つようになっていく。

支部もすぐに各地に結成される。出発して間もない1929年の10，11月には，まず東京府下野方支部（和光堂書店方），東京府下高田支部（安岡黒村方），東京市京橋支部（小黒勝市方），佐賀支部（栗原荒野方），山梨県中巨摩郡百田支部（秋山金録方）の5支部，さらにその暮れから新年にかけて，山梨県中巨摩郡飯野支部（伊

注（2）『原始』と『大地に立つ』の連続性なり，継続性については，加藤自身にも両者をうっかり取り違えるほど，つながりの強いものであった。たとえば『大地に立つ』創刊号の加藤自身による「編集の後に」の中で，「原始は早くから出来て居たのだが，印刷の行き違ひから非常におくれてしまったのが残念である」というように，『大地に立つ』というべきところを，うっかり原始と混乱して筆をすすめ，活字にもしているほどである。

東栄義方），兵庫県揖保郡揖保村鶏籠支部（真殿正好方），長野県上水内郡鳥居支部（榎田国男方）の3支部が加わるなど，随分早期に支部が全国的に結成されていく。

支部の結成は加藤および春秋社にとっても，いろいろの意味で喜ばしいことであった。まず支部がまとめて購読料こみの会費を徴収してくれること，読書会や講演会の母体になりうること，その結果加藤自身の思想や理想の啓蒙・宣伝にも寄与できることなどであった。実際に，この『大地に立つ』の時代には，加藤はよく各地に出かけ，読書会や講演会に出席している。

なお支部結成の動きに併せて，早々に支部結成規定が作成される。参考までにその規定の一部を紹介しよう。

一，『大地に立つ』支部は5人以上の同志をもって組織する。

一，『大地に立つ』同志は大地に立つ生活の意義を体得したものであって，その宣揚に努めるものでなければならぬ。

一，支部員は会費として月12銭を出す。

一，その会費は支部の責任者が集めて少なくとも月の25日までに何々支部としてまとめて発行所へ前納する。発行所からは月々の雑誌を支部宛に直接発送する。

3　『大地に立つ』のその後の展開

わずか2年足らずの継続ながら，この間，『大地に立つ』の目標やモチーフ，すなわち加藤の農民・農村社会観も重大な変化を遂げる。

『大地に立つ』出発時の加藤の農民・農村に対する考えは，まだ穏やかなものであった。理想社会の具体像の中に農村を明快に位置づけたり，それに実践性をもたせるものでもなかった。彼はいう。大地に立つ生活とは，「まず第一に大地と調和すること……。万人が万人，寄生的生活をやめることである。……利得を目的とする産業を限定することである。民衆の必要に応じて，消費を根本とする産業に限定することである。……斯くして先づ原産物を多く採取せしめよ。そして，さうした根元的な仕事の必要に応じて科学を研究せしめるがいい。否，人々をなるべく少なく働かせて，なるべく多くの余裕を持たせることによって彼等自身最も必要とする学問を研究せしめ，芸術を創作せしめるがいい。農業者や漁業者に必要なる道具や肥料を各自に製造せしめるがいい」（「大地に立つ生活の意義」『大地に立つ』創刊号）。

それにあわせて，先の刊行に際しての挨拶状にもうかがえるように，人間の生活は大地に立つことこそ，主眼とされるべきであるという視点を基礎に，当面『大地に立つ』も「理論的にやって見たい」（前掲「編集の後に」『大地に立つ』創刊号）と，理論面からのアプローチに力を入れることも示される。具体的には大地に立つ視点から「現代文明を批評し，新らしき進路を求むると共に，特に，東洋思想及び農村問題，農民文学に力を注ぎたいと思って居る」のであった。

ところが，号を重ねるにつれて，たんに「理論的に」考えたり，批評するだけでは収まらなくなっていく。「農本社会の建設へ」（『大地に立つ』）を書き，それに対する賛辞や批判を受けたりしつつ，農民自治を基礎に，かつ農業本位・農民本位の構想の上に立つ農本社会の建設を具体的な目標に掲げるようになっていく。しかも，そのために自らも共働者となる実践に取り組む決意を固めるところまですすんでいく。そこでは，「一切の根源，一切の生みの親，一切の墓場である」（前掲「農本社会の建設へ」）大地のもとでの生活，すなわち「百姓」こそ万人が取り組むべき生活であり，労働であること，それによって搾取もなくなり，人間的な生活も可能になることが示される。それと同時に，都会や工場への嫌悪の情もどんどん強くなっていく。ここまで来れば，「百姓」生活の実践も時間の問題であった。

加藤は，すでに1927年に「春秋社から若干の金を出してもらったのと，翻訳の前借とで」（「手紙代りに」『大地に立つ』創刊号），まだ田畑が一面に広がっていた神奈川県都築郡新治村中山（現横浜市緑区）に大きな邸宅を建てていた。ここを足場に農本社会建設への第一歩を踏み出すのはそうむずかしいことではなかった。実際に自宅からそう遠くない川井に，まもなく共働農本塾を開く。

このような農本社会への希求，そしてその実践が本格化するのは，第2次『大地に立つ』の時代に入ってからである。本稿が対象にしている第1次でも，大地に立つコミューン＝農本社会構想はかなり具体化されるが，実践への本格的な踏み出しまでは到達していない。

第2次『大地に立つ』が刊行され，農本塾が開かれるときには，親戚の加藤武をはじめ，読者の中村敬一，池田一三らも加藤の構想に賛同し，農本塾の塾生や共働者として川井にやってくる。結局はその生活は不徹

底に，しかも短期間で終わるが，一時的にはそこに新しい創造的な生活が始まる。

4　『大地に立つ』の位置

かつて農業・土地を基礎にした本然生活を唱え，実践した加藤は，アナキズム運動を含めた社会運動の高揚する1919年前後から久しく農業本位の生活を離れていた。鋤や鍬に代えて，筆や口舌をもって都会で文芸や社会評論に関わる生活に重心をおいてきた。『原始』もまさしくその流れに属し，文芸中心の個人誌（後には個人誌を超えてアナキズム系文芸誌の性格をもつにいたるが）であった。

ところが，『原始』を廃刊してから，2年近くの沈思黙考の果てに，加藤は再び農業・土地に回帰する。その最初の明快な意志表示が『大地に立つ』の刊行であった。同誌でも，第1次と2次ではもちろん，第1次の中でも，前半と後半とでは姿勢は変わるが，全体を貫くモチーフは創刊号に掲げられた＜宣言＞にあたる次の巻頭言によく表現されている。

一，人間は「大地に立つ」て生きねばならぬ。

一，社会は「大地に立つ」てその機能を発揮するものでなければならぬ。

一，「大地に立つ」者とは他人を土台とすることなくそれ自ら生活の根源より発するところの生活をなすものである。

一，「大地に立つ」社会とはそれ自ら生命の根基から発露する統制の下に在るものである。

一，現代の文明は此の根底から断たれた根なし草の花に過ぎない。それは奴隷への寄生木である。

一，「大地に立つ」にはおのづからその方法がある。頭を地にしては大地に立つことを得ない。足を浮かしては大地に立つことを得ない。

一，我等は「大地に立つ」ことを学ばねばならぬ。

加藤の土地・農民運動に対する関わり方は，当時のアナキズム系でもけっして一般的なもの，主流にあるものではなかった。

戦前のアナキズム系の農民運動は大きく3つの流れに分けて考えることができるであろう。その1は，古田大次郎，中名生幸力，望月桂，木下茂らが小作人社や農村運動同盟を担う流れである。主に1921年から28年にかけての動きである。反地主・反権力の視点に立つ小作人運動で，啓蒙・宣伝活動が中心になる。自らは必ずしも農村に居を構えたり，農業に従事するわけではない。もちろん農村・農業生活を試みなかったわけではないが，厳しい弾圧の下で，定住することはできなかった。

その2は，そろそろこの昭和初め頃から動きだしていて，やがて長野県などの農村にも根強く協力者を生み出す農村青年運動の流れである。単なる外からの啓蒙・宣伝を超えて，農村・農民とも結びつきをもち，全村運動を土台に農村改革，さらには農村革命をも志向するグループである。宮崎晃（添田晋），鈴木靖之，星野準二らがこの流れに属す。なお農村における実践性という点では農民自治運動も，この流れで考えることができよう。

その3が，加藤らの流れである。社会変革とむすびついた組織や実践よりも，農本主義にたって個としての農業実践と陶冶に目標をおく。だから，一面で都会や工業の否定の上に，新しい農本社会の建設を目指すのであるが，その際，全社会的な変革の理論や運動とは，観念では結びついても，実践ではかみあわぬ面をもつ。他面で日本村治派同盟や岡本利吉らの農村青年共働学校とも一時的に結びつくように，加藤の農本社会論は特定のイデオロギーや運動論の枠をこえて，無限定に広がる可能性ももっていた。この点はのちに農村青年社グループに強く批判されるところである。

もともと加藤のアナキズムは，個人主義的・哲学的性格が強く，運動としての社会変革論と結びつくよりも，ニヒリズムのような個の変革に帰着する性格が強かった。農業との関わりにおいても，個人主義的・人間主義的視点での関わりがきわめて濃厚である。搾取することも，されることもない生活，自ら無に到達できる生活，それを土地に立脚する農業生活に求める。そうであるとすると，晴耕雨読の修養主義的農業実践，そして非組織的農本主義にすすむ可能性が強いが，加藤はまさにその方向にすすんでいく。

しかもその個や無を支えるものとして，ほどなく再びキリスト教を受容していくことになる。

このような個人主義的・非組織的性格をもつ農業実践への打ち込みは，外に向けた『大地に立つ』がいったん中断，ついで再刊されるときには「加藤一夫個人誌」として世に送り出されることにも象徴的に現れている。個人誌といえば，全般的にも大正・戦前昭和期を通じて盛んであった。もともとその頃のアナキストの機関紙誌には，個人誌に近いものが少なくなかったが，明快に個人誌をうたったものも少なくない。その代表が加藤のそれであった。

以上のごとく，『大地に立つ』はいろいろの意味で農業・農村・農民に視点が集中されたところに顕著な特徴をもっていた。農本社会の建設にみられる将来社会の構想についても，またその生活実践についてもそれがいえるが，さらに第2次に集中するものではあるが，宗教の追求にしても，また芸術，文学，文化の領域の考察についても，それがいえる。たとえば同誌の前半は文学や芸術論にも注目すべきものがみられるが，その関心はあくまでも農が主であり，農を通しての芸術であり，文化であった。農を根元的に問い直そうとするとき，この『大地に立つ』は，多くの素材を現在のわれわれにも残しているといってよいであろう。

5　『大地に立つ』の終刊

『大地に立つ』の終刊は突然やってくる。1931年1月のことである。『原始』とちがい，きちんと終刊の告知を行っての終了ではあったが，前号までは一切予告はなく，読者の反応からみても，明らかに唐突の終刊であった。せめて最終号を終刊特集に近い編集をしていることが，読者への責任を果たしたことになるであろう。

終刊特集といってよい論稿としては，加藤の「終刊の辞」「原始を回復せよ」「新治村より」，山川時郎の「『態度の革命』の思想体系」，中村六三郎らの「誌友より」などである。その加藤の終刊の説明に少し耳を傾けてみよう。

> 「甚だ唐突ではありますが，『大地に立つ』は本号をもって終刊とします。これは私としても甚だ残念でありますが，読者諸君に於ても亦事の余りに急なのに驚かれることと思ひます。だが，私の生活に於ける運命的変革は何うしても斯くするよりほかはなかつたのであります。……私および本誌にふかい関係をもつて居るところの春秋社内の事情の変化は，私をして遂に，毎日社に出て社の事務を見なければならなくさせたのです。そのために私は，朝の6時頃に起きて7時半にはもう家を出て，夜は8時頃でなければ帰れなくなつたのです。……もし私が，強いて『大地に立つ』を続けようとしても，おそらく私は録な雑誌を出すことも出来ないでせう」（「終刊の辞」）。

ここに終刊の事情は明らかであり，とくに付け加えることはない。ただ終刊のあり方にも，『大地に立つ』が結局は加藤の半個人誌をでるものではなかったことが確認できることのみ注意を促しておきたい。

この終刊で特徴的なことは，終刊がたんなる終刊ではなかったことであろう。現実に，まったく中断なく，加藤の体力・時間的余裕にあわせた形で，翌月には何のとどこおりもなく，第2次といってよいリーフレット型（B5判）の『大地に立つ』が読者に届けられる。しかもリーフレット型第1号にあたる1931年2月号は，第1号とはせず，第1次と継続性をもたせて，第3巻第2号とされているのである。

にもかかわらず，ここで雑誌型とリーフレット型をもって，第1次と2次に区別するのに，理由がないわけではない。雑誌型がリーフレット型に変わるという外見以上に，何よりもまず第1に，加藤の半個人誌が加藤の個人誌に変わること，表紙にもはっきり「加藤一夫個人誌」とうたわれることである。第2に，内容も農民や農村の文化，芸術等に比重のあった雑誌型時代に比し，リーフレット型時代には農本社会建設への目標と実践が主たる課題になっていくことである。第3に，途中からではあるが，リーフレット時代に入って，加藤が宗教への回帰を宣言し，実行すること，それによって宗教色がきわめて強くなることである。さらに第4に，岡本利吉や橘孝三郎らとも交流をもつにいたることである。言葉をかえると，第1次は文学や美術を通して＜農＞をみる，いわば文芸・芸術と＜農＞の融合，第2次は宗教や理想を通して＜農＞をみる，いわば宗教・理想と農業の融合が特徴となっている。

ともあれ，第1次の終刊が中断なく第2次に引き継がれるにしろ，第1次『大地に立つ』は1931年1月をもって終わりを告げる。日本の産業界は恐慌の最低点をくぐりぬけ，満州事変以降の軍事色の濃化に支えられて，徐々に景気を回復していくのに，農村では急速に不況色を濃くしていくときであった。

6　『大地に立つ』総目次

第1巻第1号（1929年10月）　41頁

穀草を苅る（ロ絵ジェームス・チャピン）
（『大地に立つ』宣言）*
大地に立つ生活の意義――創刊号を出すに当り我が態度を明にす――　加藤　一夫
新しき「現代」の創始――我が散文詩――　加藤　一夫
紙手代りに(一)(二)(三)　加藤　一夫
トルストイの隠遁と死　ア・エル・トルスタヤ

尾瀬敬止訳
トルスタヤ女史を語る**　尾瀬　敬止
都会文明を排す　加藤　一夫
村落雑筆　加藤　一夫
農民文学概論(一)　加藤　一夫
思ひ出　上杉　繁
此の生活は　小須田　薫
編輯の後に　加藤　一夫

* この巻頭言には表題はついていない。宣言にあたる内容なので，仮りに「宣言」とした。

** この稿の末尾に，加藤一夫の短かい添え書きが付されている。

第1巻第2号（1929年11月）　48頁

トルストイとトルスタヤ嬢（写真　チェルトコフ撮影）
東洋思想と大地に立つ生活　加藤　一夫
村落雑筆　加藤　一夫
農民芸術史の基礎　麻生　義
無産階級美学に就いて　鑓田　研一
農民文学概論(二)　加藤　一夫
人間の力（詩）　安岡　黒村
トルストイの隠遁と死(2)　ア・トルスタヤ
尾瀬敬止訳
瘦地に萠ゆる　犬田　卯
村の暁（五幕八場）　栗原　荒野
手紙代りに
編輯の後に

第1巻第3号（1929年12月）　47頁

古代ギリシヤ農民のオリーブ採取図（口絵）
村落雑筆　加藤　一夫
農民運動の必然的動向　高群　逸枝
農民の時代――若き農村の青年，少女に送る――（詩）　安岡　黒村
農民文学概論(三)　加藤　一夫
農民芸術と都市芸術――農民芸術史序説――
麻生　義
人造人間の説　木村　幹
誌友より　高尾朝花，中島哀浪，石川三四郎，安岡黒村，秋山金六，西村陽吉，土屋公平ほか
手紙代りに　加藤　一夫
村の暁（五幕八場）　栗原　荒野
瘦地に萠ゆる　犬田　卯
編輯の後に

第2巻第1号（1930年1月）　51頁

原始日本狩猟耕人の絵画
二つの道――西洋文明は東洋文化に代られるであらう――　加藤　一夫
思想の共同確立　高群　逸枝
都市の起源とその正体　伊福部隆輝
百姓の腕（詩）　北上　允
大空の下に（詩）　土屋　公平
古代文化の探求　安岡　黒村
民謡二篇　渋谷　栄一
農村のあまりものは何うすればいゝのです　天笠　春雄
土を離るゝことの運命――友へのお答へ――
加藤　一夫
詩友より　土屋公平，松本清，大木情司，秋山金録ほか
手紙代りに
消費組合講座(一)　加藤　一夫
農民文学概論(四)　加藤　一夫
村の暁（五幕八場）　栗原　荒野
瘦地に萠ゆる　犬田　卯
編輯の後に
支部規約

第2巻第2号（1930年2月）　48頁

現代のマジック（詩）　加藤　一夫
村落雑筆　加藤　一夫
都会否定の社会的基礎　松原　一夫
階級美学論――農民芸術史序説――　麻生　義
とつちめてやれ――大地短歌――　田中　元治
農村の二男坊三男坊の問題について　小海隆三郎
土地問題と二男三男坊――小海君に――　加藤　一夫
伸び上る現実（詩）　土屋　公平
機械芸術と重農芸術との対流（航空文明は芸術を如何に決定するか）（詩）　安岡　黒村
農村青年に寄す（詩）　鷲巣　すゞ
農民文学概論(五)　加藤　一夫
消費組合講座(二)　加藤　一夫
誌友より　李哲浩，安岡黒村，保坂富士馬，山川時郎，土屋公平ほか
手紙代りに
村に帰る　小黒　勝市

村の暁（五幕八場）　栗原　荒野
編輯の後に

第2巻第3号（1930年3月）　47頁
虚無の道　加藤　一夫
文明的進歩と道徳的頽廃——悪魔の文明の一考察—　山川　時郎
共同耕作組合について　加藤　一夫
農民文学の発展性　小須田　薫
大地歌壇　栗原荒野，渋谷哲介，伊藤栄治
黎明は近づく——犬田氏の「村に闘ふ」への感想——　延原　大川
農村問題研究会仮趣旨及び規定
農村協同組合に就て　伊福部敬子
農村教育の必要　本多　雪子
土に生く　奈良喜代子
都会に押し出された小羊は（詩）　小黒　勝市
地底の叫び（詩）　土屋　公平
虚無の黒旗（詩）　不二木一郎
意欲の方へ（詩）　木川炫之介
次の時代へ（詩）　胡麻　政和
新芽がめばえた（詩）　北上　允
美のない街（詩）　安岡　黒村
農村の少女に与ふ（詩）　鷲巣　すゞ
真芽（詩）　内村　利男
落木の日の女（詩）　青山　孝之
誌友より　加藤稔，内村利男，佐藤武，鷲巣すゞ，山川時郎ほか
新治村より
消費組合講座㈢　加藤　一夫
編輯の後に

第2巻第4号（1930年4月）　60頁
文明否定の道徳的根拠——我等は何故文明を否定するか？——　山川　時郎
東洋主義と農民芸術—農民芸術史序説—麻生　義
共働農村の理論的基礎——都会偏重のマルクス説と我等——　小海隆三郎
春を待つ（詩）　北上　允
土掘る時に（詩）　鄭　秋江
空映を見た！（詩）　土屋　公平
派遣軍（詩）　小黒　勝市
文明の克服（詩）　延原　大川
自由への路!!!（感覚的生活の否定）（詩）　安岡　黒村
大地和歌
農土芸術論　土屋　公平
『土に燃ゆる』意気——寺神戸君の近業を評す　小須田　薫
農民文学概論　加藤　一夫
消費組合講座㈣　加藤　一夫
誌友より　斎藤茂吉，松本清，秋山金録，井上多一，延原大川ほか
新治村より
『牛肺疫』　田中　元治
村の暁（五幕八場）　栗原　荒野
『村の暁』を観て　中島　哀浪
編輯の後に

第2巻第5号（1930年5月）　48頁
原始社会の統制　加藤　一夫
共働農村の理論的基礎——都会偏重のマルクス説と我等——　小海隆三郎
都会文明の必然的崩壊——その実証的根拠の一つ——　山川　時郎
個人主義の哲学　ヴィクトール・バッシュ　宮田秀吾訳
農民詩及び短歌に就て　松原　一夫
エセーニン詩集　土屋　公平
自由へ，自由なる世界へ（詩）　安岡　黒村
畑に草をとる午后（詩）　内村　利男
野びる（詩）　福島久良三
新庁舎と煙突（詩）　岩浅　節
大地短歌　西山又二，小松功，長島良太郎，田中元治ほか
消費組合講座㈤　加藤　一夫
誌友より　山田清英，長嶋秀太郎，内村利男，秋山金録，保坂富士馬，小松　功，鷲巣すゞ，大木清司，山川時郎ほか
新治村より
土　岡田　寿三
編輯の後に

第2巻第6号（1930年6月）　46頁
農本社会の建設へ　加藤　一夫
耕土を追はるゝ日（詩）　鄭　秋江
村の近景——村の生きる道——　延原　大川
大地に立つ Regional Park に就いて　中村貴美夫
農民と音楽　岡田　寿三

新興短歌雑感　加藤　稔
都会文明の必然的崩壊——その実証的根拠の一つ——　山川　時郎
教壇に立てる同志達へ（詩）　石川　和民
敵はこのケタだ（詩）　大沢　重夫
雑草（詩）　土屋　公平
都会の挽歌（詩）　延原　大川
正直に向ふには（詩）　田中　瑤村
誌友より　浅川一郎，木村英雄
新治村より
無益な執行命令　ルードルフ・ガイスト　柴田帆洲訳
鴉と農夫の会話　田中　元治
編輯の後に

第2巻第7号（1930年7月）　50頁

農村問題に対する私の態度　加藤　一夫
農民美学の問題——農民芸術史序説——麻生　義
享楽的寄生虫としての文明芸術　山川　時郎
芸術派理論は時代に逆行する——農民文学の陣営から——　土村　泰
村の近景——村の生きる道——　延原　大川
共同組合の現在と将来　鑓田　研一
この道！（詩）　石川　和民
鈴蘭とふるさと——ある少女へ送る——（詩）　安岡　黒村
荒廃の中の声（詩）　土屋　公平
大地歌壇　岩浅　節
「農本社会論」批判と研究
　農民自治主義の理論と実践　山川　時郎
　新しい経済学の樹立へ　鷲巣　すゞ
　器械の肯定か否定か　中村六三郎
　農本社会と器械との問題　加藤　一夫
大地短歌　西山　亦二
債鬼　小須田　薫
無益な執行命令　ルードルフ・ガイスト　柴田帆洲訳
編輯の後に

第2巻第8号（1930年8月）　48頁

農村生活の問題　加藤　一夫
大地歌壇　上田舟三，浅川一郎
孤愁（詩）　安岡　黒村
殿堂宗教の非社会性——予言者宗教の大衆性——　山川　時郎
大地短歌　沢村隆次，内田一夫
農民階級の音楽——その端緒として——土屋　公平
共同経営組合の現在と将来(二)　鑓田　研一
村の近景——村の生きる道——　延原　大川
農本社会の精神的把握　中村六三郎
器械・文明・精神　加藤　一夫
大地にしつかりと立ちあがって（詩）　一之木溪楓
母（詩）　胡麻　政和
鍬と兎（詩）　福島久良三
この腕この肉腰（詩）　酒井　沢樹
新治村より
慰安会とおきん　山田　清英
街・村・生活——四景——　小黒　勝市
編輯の後に

第2巻第9号（1930年9月）　50頁

産業主義を排す　加藤　一夫
態度の変革　中村六三郎
文明的享楽の否定　山川　時郎
農民文学の新しい形式　土村　泰
共同経営組合の現在と将来(三)　鑓田　研一
村の近景　延原　大川
農本社会の施設と様式　小須田　薫
農村生活の問題　加藤　一夫
母を思ふ（詩）　安岡　黒村
短詩——虚無を歌ふ——　西山　亦二
散文詩　自然に，自由に　鄭　秋江
誌友より　林原尚孝，西山亦二，三井寿袈緒
新治村より
次男坊　小橋　浩
街・村・生活——四景——　小黒　勝市
編輯の後に

第2巻第10号（1930年10月）一週年記念特別号　64頁

創刊一週年記念号を出すに当り再び我等の根本原理を反省す　加藤　一夫
「大地に立つ」一年を終る　土屋　公平
大地歌壇　大木　清司
我等は農村問題研究会を如何に持つべきか——一周年記念号のために——　加村　喜一
「態度の革命」の理論的根拠　山川　時郎
農村を救う力　中村六三郎

母（長詩）　安岡　黒村
大地短歌　西山　亦二
農村消費組合の信用制について　松本　清
農本社会の諸問題　延原　大川
「草宴」　金　小岡
農民小唄の考察　田中　元治
農民詩の本質　土屋　公平
戦線に立つ（詩）　土田　耕助
徴兵署にて（詩）　石川　和民
白色奴隷の航路（詩）　木下　勇
民謡・秋が来る（詩）　金　小岡
檳榔樹（詩）　小松　里夫
正義の憤激（詩）　小須田　薫
共同経営組合の現在と将来（四）　鑓田　研一
日本中世及び近世の農村生活　加藤　一夫
誌友より　堀下幸治，志村洪ほか
新治村より
大地短歌　上田　舟三
黒旗をおつ立てゝ（朗読戯曲）　土村　泰
白楊木（小説）　張　赫宙
編輯の後に

第2巻第11号（1930年11月）　49頁
東洋思想の展開へ　加藤　一夫
イズムに対する考察　中村六三郎
「態度の革命」の理論的根拠　山川　時郎
農民音楽建設に関するノート　土屋　公平
秋風賦（詩）　安岡　黒村
母上の霊前に捧ぐる詩三篇　安岡　黒村
農村とスポーツ熱　藤平　貞司
共同経営組合の現在と将来(四)　鑓田　研一
現代に於ける農村生活　加藤　一夫
新治村より
野菊の花――愛妹康子に与ふ――（詩）　延原　大川
暮秋（詩）　宮崎　秀
盆地――Nに歌ふ　李　均
短詩　西山　亦二
灼熱の田園で　山本　晴工
初秋短唱　西山　亦次（ママ）
死と生を超える（大地短歌）
おきんの出郷　山田　清英
海浜を持つ農村　岡田　寿三
編輯の後に　加藤　一夫

第2巻第12号（1930年12月）　47頁
農村の経済問題　加藤　一夫
埴輪土偶の農民　麻生　義
態度の革命　其の経済的意義　松本　清
「態度の革命」の理論的根拠　山川　時郎
イズムに対する考察　中村六三郎
私の思想的転機と其感情的表現　安岡　黒村
村を憶ふ（詩）〔附記〕私の詩に就て　延原　大川
乗船命令　木下　勇
俺の歌（手記詩篇）　土屋　公平
詩人の積極性と消極性を論じ――土屋公平君の一詩集「新しい地床」への批評――　安岡　黒村
農民小唄と農民詩　土村　秦
酒倉庫　堀下　幸治
黒色讃歌　田中　元治
新治村より

第3巻第1号（1931年1月）　45頁
終刊の辞――附，新しい計画の予告　加藤　一夫
農村社会研究会規約
リーフレット型『大地に立つ』について
原始を回復せよ　加藤　一夫
態度の革命・その経済的意義　松本　清
『態度の革命』の思想体系――「大地に立つ」廃刊を記念として――　山川　時郎
現代農村教育批判　藤平　貞司
共同経営組合の現在と将来(五)　鑓田　研一
十二月の霧――新しい永遠の理想を誓ふ幻に燃ゆる少女へ――（詩）　安岡　黒村
まってろお母よ（詩）　北上　允
杉の枝を下す（詩）　土田　耕助
銃口を向ける――町に憧憬れ，町に嫁ぐ女に――（詩）　古山　信義
生命の侭に（詩）　池田　一蔵
饑餓の港（詩）　木下　勇
噴上る愛（詩）　西山　亦二
土の歌　西山　亦二
誌友より――『大地に立つ』の廃刊に臨んで――　山川時郎，中村六三郎，堀下幸治
盗伐の後に（小説）　山田　清英
新治村より

（経済学部教授）